校長室から　平成３０年１０月５日

保護者の皆さまへ

１学期が終了しました

思春期の子ども達と一緒に生活して考えること

平成３０年度、一学期が終了しました。４月から新しい生活が始まり、子ども達は、新しく担当になった先生方、新しい友人と過ごし、約六ヶ月が経過しました。この大規模校で他校の生徒よりも数多くの人との関わり合いがあり、時には喜び、時には苦しみ、時には悲しみ、時には励まされ、忙しい日々を送っています。この数ヶ月、何も悩まずに過ごした生徒は恐らくいないと思います。人と多く関われば、喜びも大きいですが、煩わしさが増える事もあります。

人間関係だけではなく、学習や部活動、自分に与えられた責任ある活動をやり抜くために悩やんだり、プレッシャーに押しつぶされそうになったりする場面もあったと思います。

私たち大人は、困難な場面に遭遇しても、これまでの経験を生かしながら、様々な知恵を駆使して、折り合いをつけながら生活することが出来ます。しかし思春期の彼らは、自分の辛さや苦しみを自分で消化できない時がありますし、それを言語化できず、悶々と日々を送ることもあると思います。その反動が時には、親への反抗になったり、時には人に攻撃的になったりする場合もあります。また、心の内側にこもってしまう場合もあります。何を悩んでいるのか自分でも理解できないという事もあるでしょう。何に怒り、何に不安を持ち、何に不満を抱いているか上手に表現できない場合もあります。それでも、彼らは登校すると元気にあいさつし、授業に参加し、笑顔で学校行事等に取り組んでいます。たとえ登校できなくても、不安を感じながら、何かに打ち勝とうとしている事。私は、その事自体が尊い事だと思っています。やがてこの時期が過ぎ、振り返ってみると「あんな事で悩んでいたのか」と感じる事もあるでしょう。私たち大人も遠く過ぎてしまった思春期時代の事を忘れ、「こんな事で、悩んでいるのだったら頑張りなさい。」と簡単に一言で済ましてしまう場合もありますよね。きっと彼らにとっては一つ一つ、そして一人一人の悩みや苦悩の重さは異なると思います。

本日、お子様に渡した通信票は、教科の評定が五段階で示されています。思った以上の評価が得られた生徒、自分の目標を達成できた生徒にとっては、十分満足できるものであると思います。どうか心からお子様を褒めてあげてください。

しかし、なかなか思ったような評価ではなかった生徒にとっては、保護者の方々に通信票を手渡す時に、ためらい、躊躇してしまう気持ちがあるかもしれません。きっと様々な心持ちで帰宅すると思われます。それぞれのご家庭の方針はあると思いますが、帰宅して、通信票を差し出すお子様の六ヶ月間の成長を認めて、褒めてあげてください。心よりお願いいたします。

ご存じのとおり、通信票の評定の数値は、教科への取組に対する結果であり、決して人間の価値を決める数値ではありません。生徒一人一人が通信票を見て何かを考え、何かに気付き、自分と向き合い、受け止め、何をどのようにしていくとよりよく生きていけるのかを考えるツールです。しかしながら、現実には、この評価の結果を参考にして高校入試というシステムに活用されるのも確かな事です。だから日本中の今を生きる生徒たちも、かつて中学生時代を経験した私たちも結果を見るたびに苦しんできました。私たちもかつて同じ苦しさを経験してきたからこそ、「もっと頑張りなさい。」「どうしてこんな成績なの。」「もう少し勉強しなさい。」「お兄ちゃんはあんなにできた

裏面へ

のに・・。」等だけではない声がけが必要なのだと思います。それは私たち教員も深く考え、子ども達に寄り添い、実践していきたいと思います。

私は教師としての立場ではなく、二人の子どもを育てた親として、今、痛切に反省している事があります。「あの時もっと別な声がけをしてあげればよかった。」「もっと褒めてあげられなかったか。」「あんなに叱りつけなくてもよかったのではないか。」「兄弟を比較しすぎて、人格を否定していなかったか。」「叱咤激励する場面を間違えていたのではないか。」当時の事を振り返ると、恥ずかしくなる事が多くあります。しかし、その時は本気の親の愛情として示したものでした。親自身もきっと、子育てをしながら、子どもと共に成長していかなければならないと今も感じています。

さて、話は変わりますが、私が若い時分、３年生の学級担任をしていた頃の事です。私のクラスに一人の女子生徒がいました。評定は「オール５」、生活態度もしっかりしていて、常に学級・学年のリーダー的な存在で、私の部活動に所属していました。もちろんエース級の活躍で、誰からも一目置かれていました。自分の目標を達成し、希望の高校へ進学していきました。

翌年、私は１年生の担任となり、その生徒の妹の学級担任になりました。もちろん姉妹とはいえ、姉とは全く異なる人格でした。入学してすぐに、その生徒が涙を流しながら、「先生、相談があります。」と職員室に来ました。場所を変えて、話を聞いたところ「私は、自分の名字や名前で人から呼ばれた事がない。いつも〇〇の妹、と言われます。お姉ちゃんは優秀だったよね。お姉ちゃんすごかったよ。お姉ちゃんは元気にしてる？　私は私で姉ではないのに、いつも〇〇の妹と呼ばれ、比較されて、自分がどこにもありません。」ずっと泣いていました。しばらく言葉を掛けられませんでした。そして私を見ながら「先生もきっと私を姉と同じバスケ部に入部させようとしていますよね。私は姉ではないので絶対バスケ部には入部しません。」気持ちがよく分かりました。私も中学生の頃に同じような事を経験していたからです。それでも彼女が前向きになるような助言はしてあげられなかったと思います。自分が出来た事といえば「〇〇」と、ひたすら固有名詞で呼び続けた事だけでした。私は３年間の中で２度、その生徒の担任でした。卒業していく時に「私を名前で呼び続けてくれてありがとうございました。」と感謝されましたが、私自身も考え続けた３年間となりました。しかしながら、妹も苦しんでいましたが、実は姉は姉で苦しんでいました。期待に応えなければならない自分、頑張り続けなければならない自分、順位を下げて親をがっかりさせてはいけない自分、人と比較されても恥ずかしくない自分として必死に生きていたのです。その事はずっと後で知りました。今は二人とも母親になり、他の親御さんと同じように子育て中です。

長くなりましたが、子ども達は、いつの時代も今という時を必死に生きています。「自分はだめな人間なのではないか」「自分にはどんな価値があるのだろう」「もっとよりよく生きたい」「どうしてあの人は優秀なのに、自分はだめなのか」「あの子の明るさが羨ましい」「あんなふうに自分もなりたいけどなれない」「努力したいけど続かない」「せっかく上向いた順位を下げてはいけない」それぞれの悩みと向き合い、今を生きていると思います。

我々教職員は、子ども達に対して、時には寄り添い、時には叱咤激励し、支えながら、保護者の方々と連携しながら支援していければと思っております。それが長町中学校の通信票「かけ橋」の意味でもあります。

私の公私に渡る恩師がいつも言っていました。「子どもと接する時、田んぼに一緒に入ってはだめだ。それは子どものグラウンドだ。子どもが泥にはまってしまったら、一緒にいるとお前も同じように身動きが取れなくなる。あぜ道をそっとついて行きなさい。そして子どもが助けを求めるサインを出したら、飛び込んで助け出すんだよ。それが大人の仕事だ。」心に響く言葉です。

長町中学校のすばらしき生徒達が、

二学期また元気に学校に戻ってくる事を楽しみにしております。